

## 三重県鈴鹿市における3拍語のアクセント

竹内 はるか(國學院大學大学院)  
y124209@kokugakuin.ac.jp

### 1. はじめに

本発表では、三重県鈴鹿市方言における3拍の名詞、動詞、形容詞のアクセントの実態を式の対立、所属語彙と型の相の観点から述べる。

三重県鈴鹿市は、服部(1930)の「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」や丹羽(2000)に述べられているように伝統的には京阪式のアクセントの地域である。しかし、近年報告があるように鈴鹿市では京阪式の体系を保持する話者と東京と似た体系を持つ話者が混在し、同一世代での個人差も大きい。このような複雑な当該地域のアクセントの実態を明らかにするために、拍数が比較的長く安定性があり、また古い文献による記録が残されており先行研究との比較も行いやすい3拍語に着目する。

三重県鈴鹿市のアクセントは、これまでに竹内(2015)(2017)で述べたように高起式、低起式という式の対立でみると以下の三つのタイプに解釈することができる。

- (1) 式の対立と下がり目の位置で解釈できるAタイプ
- (2) 拍数、型によって解釈の仕方が異なるABタイプ(式の対立が曖昧)
- (3) 下がり目の位置のみで解釈できるニュータイプ

本稿では上記の三つのタイプにわけ、三重県鈴鹿市における3拍語の実態を述べる。

Aタイプ、ABタイプは式の対立の他にも異なる特徴が観察される。Aタイプはそれぞれの型における所属語彙もほぼ京都と同様に観察される。それに対し、ABタイプは、共通語アクセント化が進んでいる様相が観察される。特にABタイプにおいて共通語アクセントで話される語がどれだけあるかについては個人差がみられる。

### 2. 調査について

調査日は2008年9月から2016年8月で、調査は対面式で行った。動詞と形容詞は共通語での文例を示し、それを普段の言い方でどう言うかを尋ねる方法で行った。

話者は、15～86歳の鈴鹿市生え抜きの話者42名で、特に本稿では、Aタイプの話者としてH.O(1931年生まれ、女性)を、比較的古相に近いABタイプ①の話者としてK.I(1985年生まれ、女性)、比較的共通語化が進んでいるABタイプ②の話者としてS.T(1988年生まれ、男性)の結果を中心に示す。

調査語は1拍から4拍の名詞と2拍から4拍の動詞と形容詞の活用形で、本稿では3拍の名詞125語、動詞75語、形容詞25語について詳述する。調査語彙は平山(1960)による。

調査地点である三重県鈴鹿市の人口は20万282人(2016年6月30日)で、県北部に位置する。また、古くから東海道の要所として上方と江戸の行き来が盛んで、市内では1616年44

番目の石薬師宿、1624年に45番目の庄野宿が設けられた。

現在の交通としては、公共の乗り物は近畿日本鉄道(近鉄)が主で、乗り換えを考えると大阪、京都へ出るよりは名古屋方面へ向かう方が容易である。

以下記号については●、▶は高く発音される拍を、○、▷は低く発音される拍を、◎は中間的な高さを示す。以下の京都アクセント、東京アクセントは平山(1960)によるものとする。

### 3. 3拍名詞のアクセント

3拍名詞のアクセントについて、以下に式の対立、安定している型、タイプによって大きく異なるアクセントが観察される型についてそれぞれわけて詳述する。

#### 3.1. 式の対立について

式の対立については、Aタイプは対立を保持している相、ABタイプでは曖昧になっている相が観察される。具体的には表1のABタイプの①にみられるように「鰻が」など伝統的には低起式の○○○▶となる語を安定して●●●▶で発音するなど伝統的な式とは異なる式で発音する語がみられる、「鼠が」「狐が」など●●●▶、○○○▶のどちらで発音してもよい語が観察されることがあげられる。

京都アクセントが高起式平板型●●●▶になる語は、ABタイプにおいては一拍目が若干ゆるんで観察されるものの、低起式平板型より安定して京都と同じアクセントで観察される。ただし、ABタイプ②の話者では「桜が」や「机が」が●●●▶、○○○▶のどちらで発音してもよいなど低起式平板型の「鼠が」「狐が」などと同様の様相も観察された。

表1 京都アクセントが低起式平板型の語のアクセント

京都アクセント	類	語彙	Aタイプ	ABタイプ①	ABタイプ②	東京式アクセント
○○○▶	1	昔	●●●▶	◎●●▶~●●●▶	◎●●▶~●●●▶	○●●▶
	6	兎	○○○▶	○○○▶	○○○▶	
		鰻	○○○▶	◎●●▶~●●●▶	○○○▶	
		狐	○○○▶	○○○▶~◎●●▶	○○○▶	
		スズメ	○○○▶	○○○▶	○○○▶	
		背中	○●○▷	○○○▶	○○○▶~○●○▷	
		鼠	○○○▶	○○○▶~◎●●▶	○○○▶	
	裸	○○○▶	○○○▶~◎●●▶	○○○▶		
	ヒバリ	○○○▶	◎●●▶~●●●▶	◎●●▶~●●●▶		
	誠	○○○▶	N R	○○○▶		
	ミミズ	○○○▶	○○○▶	○○○▶		

#### 3.2 安定して観察される型について

京都アクセントと東京式アクセントが同じ語、たとえばどちらも頭高型●○○▷である語「えくぼが(2類)」「鮑が(3類)」「鯿が(5類)」などは全タイプを通じほぼ安定して頭高型で観察される。ただし、ABタイプにおいては●○○▷~○●○▷でゆれが観察される語「枕が」「涙が」などが少数みられる。「枕が」「涙が」などは名古屋アクセントが○●

○▷となる語である。

京都アクセントが○●○▷である語については表 2 にあるように東京アクセントがどのような型であっても比較的安定して全年層を通じ○●○▷型を保持している。このような安定性は当該地域においては他の型にみられないもので、当該地域において○●○▷型は安定性があると考えられる。

表 2 京都アクセントが○●○▷型の語のアクセント

京都アクセント	類	語彙	Aタイプ	ABタイプ①	ABタイプ②	東京式アクセント	
○●○▷	2	翼	●●●▷	◎●●▷～●●●▷	◎●●▷～●●●▷	○●●▷	
		つるべ	N R	N R	◎●●▷～●●●▷		
		トカゲ	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		ムカデ	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
	7	後ろ	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		鯨	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		薬	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		タライ	○●○▷	○○▷	◎●●▷～●●●▷		
	6	2 緑	○●○▷	○●○▷	○●○▷		●○○▷
		高さ	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		狸	○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		7	蚕	○●○▷	○●○▷	○●○▷	
			兜	○●○▷	○●○▷	○●○▷	
			便り	○●○▷	●○○▷	○●○▷	
			椿	○●○▷	○●○▷	○●○▷	
		病	○●○▷	●○○▷	○●○▷		
	2	毛抜き	○●○▷	○●○▷, ●●●▷	○●○▷	○●●▷	
		二つ	●●○▷～○●○▷	○●○▷	○●○▷		
		二人	●●○▷～○●○▷	○●○▷～●●○▷	○●○▷		

### 3.3 タイプによって大きく異なるアクセントが観察される型について

東京で○●●▷となる語は、当該地域のAタイプとABタイプで異なるアクセントが多く観察される。特にABタイプでは京都アクセントでは観察されない尾高型◎●●▷～●●●▷が観察される。この尾高型は、初めの高さに関しては東京とは異なり語中であっても高く始まっても、若干ゆるんだ高さになっていてもよい。

また、同じABタイプでも話者によって○●○▷と●○○▷で異なったアクセントで観察されていたり、個人内でも○●○▷～●○○▷でゆれていたりする語がある。これは榎垣 (1957)、村中 (2005) にあるように京阪式アクセントにおける●●○からの○●○や○○への変化が関係していると考えられる。今回の調査において●●○▷型が観察されたのは、「小豆」「二つ」「二人」の3語であった。ただし、●●○▷のみが安定して観察されることはなく、3語とも○●○▷でも発音される。しかし●●○▷型は1985年生まれのABタイプでも観察された。どの語がどちらの型で発音される場合が多いのかなどは今後の課題である。

表3 東京式アクセントで尾高型となる語のアクセント

京都アクセント	類	語彙	Aタイプ	ABタイプ①	ABタイプ②	東京式アクセント
●●●▷	1	麓	●●●▷	○●○▷~●●●▷~◎●●▷	○●○▷~●●●▷~◎●●▷	○●●▷
		恨み	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
		暦	●○○▷	◎●●▷~●●●▷	○●○▷	
		林	●●●▷	◎●●▷~●●●▷	◎●●▷~●●●▷	
		仏	●●●▷	◎●●▷~●●●▷	◎●●▷~●●●▷	
●○○▷	2	小豆	●○○▷	●○○▷	●○○▷	○●●▷
	3	力	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
	4	頭	●○○▷	○●○▷	○●○▷	
		イタチ	○●○▷	○●○▷	◎●●▷~●●●▷	
		扇	●○○▷	○○○▷	○○○▷	
		男	●○○▷	●○○▷~○●○▷	●○○▷	
		面	●○○▷	N R	●●●▷~◎●●▷	
		鏡	●○○▷	○●○▷	○●○▷	
		仇	●○○▷	●○○▷~○●○▷	○●○▷	
		刀	●○○▷	○●○▷	○●○▷	
		瓦	●○○▷	●○○▷	○●○▷	
		宝	●○○▷	●●●▷~◎●●▷	●●●▷~◎●●▷	
		袴	●○○▷	○●○▷	○●○▷	
		東	●○○▷	◎●●▷~●●●▷	◎●●▷~●●●▷	
		光	●○○▷	●●●▷~◎●●▷	●●●▷~◎●●▷	
		響き	●○○▷	●●●▷~◎●●▷~●○○▷	●●●▷~◎●●▷	
	袋	●○○▷	○●○▷	○●○▷		
	筵(ムシロ)	●○○▷	N R	◎●●▷~●●●▷		
	5	禪	●○○▷	●○○▷	●○○▷	
	○○○▷	2	昨夜(ゆうべ)	○○●▷	○○●▷	
○●○▷	2	毛抜き	○●○▷	○●○▷~●●●▷	○●○▷	
		二つ	●●○▷~○●○▷	○●○▷	○●○▷	
		二人	●●○▷~○●○▷	○●○▷~●●○▷	○●○▷	

#### 4. 3拍動詞・終止形のアクセント

鈴鹿市における3拍動詞のアクセントは、Aタイプ、ABタイプともに四つの型が観察された。●●●：高起式で下がり目のない型、○○●：低起式で下がり目のない型、○●○：低起式で2拍目に下がり目がある型、●○○：頭高型である。

●●●で観察されるのは主に1類の語、2類の五段活用の語である。○○●で観察されるのは主に3類の語である。○●○で観察されるのは主に2類の一段活用の語である。京都では2類の一段活用の語は○○●で観察されるが、丹羽(2000)にあるように三重県鈴鹿市においては伝統的に○●○型で観察される。

表4にあるようにAタイプとABタイプで大きく異なるのは、Aタイプにおいて○○●型で観察される語、すなわち主に3類の語である。具体的には「歩く(3類)」「入る(3類)」「遊ぶ(1類)」がABタイプでは○●○で発音されている。特にニュータイプでは、○○●型が観察されず、すべて○●○に変化している。

表4 京都アクセントが○○●の動詞アクセント

京都アクセント	類	語例	Aタイプ	A Bタイプ①	A Bタイプ②	ニュータイプ	東京式アクセント
○○●	1A	遊ぶ	○○●	○○●	○○●	○○●	○●●
		1B	植える	○○●	○●○	○●○	
	捨てる		●●●	●●●~◎●●	●●●~◎●●	○●○	
	2B	生きる	○●○	○●○	○●○	○●○	○●○
		起きる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		落ちる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		掛ける	○●○	○●○	○●○	○●○	
		覚める	○●○	○●○	○●○	○●○	
		建てる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		付ける	○●○	○●○	○●○	○●○	
		溶ける	○●○	○●○	○●○	○●○	
		撫でる	○●○	○●○	○●○	○●○	
		逃げる	○●○	○●○	○●○	○●○	
	晴れる	○●○	○●○	○●○	○●○		
	3	歩く	○○●	○○●	○●○	○●○	
		隠す	○○●	○○●	○●○	○●○	
	3	入る	○○●	○●○~○○●	○○●	○●○	

5. 3拍形容詞・終止形のアクセント

表5 3拍形容詞のアクセント

京都アクセント	類	語例	Aタイプ	ABタイプ①	ABタイプ②	ニュータイプ	東京式アクセント	名古屋アクセント		
●○○	1	赤い	●○○	●○○	○●○	○●○	○●●	○●○		
		浅い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		厚い	●○○	●○○	○●○	○●○				
		甘い	●○○	●○○	○●○	○●○				
		荒い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		薄い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		遅い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		重い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		堅い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		軽い	●○○	●○○	●○○,○●○	○●○				
		暗い	●○○	●○○	●○○,○●○	○●○				
		遠い	●○○	●○○	●○○	○●○				
		2	熱い	●○○	●○○	●○○			○●○	○●○
			黒い	●○○	●○○	○●○			○●○	
	白い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	高い		●○○	●○○	●○○,○●○	○●○				
	近い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	強い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	長い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	早い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	低い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	深い		●○○	●○○	○●○	○●○				
	古い	●○○	●○○	○●○	○●○					
	弱い	●○○	●○○	○●○	○●○					
	2	多い	●○○	●○○	●○○	○●○	●○○			

3拍形容詞の京都アクセントは1類、2類ともに●○○とされている。

鈴鹿市においても、Aタイプ、すなわち高年層や古相を保つ若い世代は「赤い」「白い」など1類、2類ともに●○○で観察される。ただし、ABタイプでも共通語アクセント化が進んでいる話者やニュータイプにおいては1類、2類ともに○●○型で発音する語が観察される。特に、式の対立を保持しておらず、異なる拍数や品詞で共通語アクセント化が進んでいるニュータイプの若年層話者においては1類、2類ともに○●○のみが観察された。

芥子川(1983)にあるように、名古屋では東京のアクセントと異なり3拍形容詞は1類、2類ともに○●○で発音される。みかけでは3拍形容詞・終止形のアクセントは名古屋アクセントと同じに変化している。ただし、名古屋アクセントの影響を受けたのか、頭高型のアクセントからアクセント核を一つ後ろに送る型への変化が進んだのかについては活用形のアクセントなどもふまえて今後の考察課題としたい。

## 6. おわりに

名詞は、式の対立が曖昧になりつつある様相が観察される。具体的には伝統的には低起式の○○○▶となる語を安定して●●●▶で発音するなど伝統的な式とは異なる式で発音する語がみられる、●●●▶、○○○▶のどちらで発音してもよい語が観察されるなどである。動詞は各年層を通じて古相を保持しており、類と型の対応がある。「歌う」や「余る」など1類と2類の五段活用の語が●●●、「生きる」など2類の一段活用の語が○●○、「歩く」など3類が○○●で対立を示し、式の対立を保持しているが、3類の○○●は○●○に変化しつつある。形容詞は、高年層や古相を保つ若い世代は「赤い」「白い」など1類、2類ともに●○○で観察される。ただし、変化が進んでいる新しいタイプの若年層は1類、2類ともに○●○で観察される。品詞全体を通し○●○型は安定した型であるといえる。

## 参考文献

- 榎垣実 (1957) 「大阪方言アクセント変化の傾向」『近畿方言双書 方言論文集』2
- 芥子川律治(1983)「愛知県方言」『中部地方の方言』(「講座方言学」6) 国書刊行会
- 竹内はるか (2015) 「三重県鈴鹿市のアクセントの研究」『國學院大學大学院紀要－文学研究科－』第46輯
- 竹内はるか (2017) 「三重県鈴鹿市における用言の活用形のアクセント」『國學院大學大学院紀要－文学研究科－』第48輯
- 西宮一民 (1961) 「方言の実態と共通語化の問題点 三重・奈良・和歌山」東条操監修『方言学講座 第三巻 西部方言』東京堂
- 服部一郎 (1930) 「近畿アクセントと東方アクセントとの境界線」『音声の研究』第3輯 岡書院
- 平山輝男・丹羽一彌ほか (2000) 『日本のことばシリーズ24 三重県のことば』 明治書院
- 平山輝男編 (1960) 『全国アクセント辞典』第22刷 東京堂出版
- 村中淑子 (2005) 「大阪における3拍名詞のアクセント－東大阪市100人調査の結果より－」『姫路獨協大学外国語学部紀要』18 姫路獨協大学